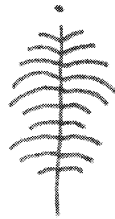


地域と協働する実践的教員養成プロジェクト

教育COOLに採択されて

森 透

福井大学・教育地域科学部附属教育実践総合センター



□ はじめに

今、大学のあり方が社会から問われている。今までは、大学人は自分の好きな研究を中心に生活していればよかった時代であったかもしれないが、今はそれではいけない。戦後の大学が大衆化したことも大きな理由のひとつであるが、大学が果たす社会的役割が鋭く問われ、学問研究を社会にいかにも還元するののかという社会的価値が国民の目にかかるようにしなければ納得されない時代となってきた。特に国民の税金で成り立っている国立大学や公立大学はなおさらのことである。このような時代の趨勢は大学人にとつ

ては厳しいものであるが、しかし悪いことではなく、改めて自分の学問研究と教育の関係、社会との関係を捉えなおす機会となるし、そうしなければならないとも思う。

私の所属する教員養成の学部でも社会からの問い直しは厳しい。とりわけ近年の少子化の影響で教員の需要が減少し、学生の教員就職率が大変厳しい状況にある。同時に、大学が行ってきた今までの教員養成のあり方ではよいのか、本当に質の高い教員を養成しているのかという社会からの目も厳しい。「国立の教員養成系大学・学部の在り方に関する懇談会報告」（二〇〇一年十一月）の指摘の中には、あたっている箇所もある。従来の教員養成のあり方につい

て、確かに教育学部内部での議論が十分ではなかったといえる。教員の専門性とは何か、その専門性を育てるためには学部としてどのようなカリキュラムやシステムを考えるべきなのかについて、戦後ずっと議論してきたように思うが、しかし、教職科目や教科専門の担当者の連携は必ずしもうまくいかず、それぞれの壁が高かった。教える学生たちは基本的に教員になるという現実を大学人は共有するこ



もり・とおる ●一九五〇年、東京都生まれ ●専門は教育学・教育相談・教育実践史 ●主な著書、論文に(共著)『教室の中の気がかりな子』朱鷺書房、二〇〇三年、「教育実践史研究ノート(1)」『福井大学教育地域科学部紀要』第六

〇号、二〇〇四年、「長期にわたる総合学習実践の分析」『教育方法学研究』第二五巻、一九九九年、(共著)『教育改革―教師教育改革と学校―大学の共同研究の展開』『福井大学教育地域科学部紀要』第五五号、一九九九年 ●大学での子どもたちと学生との共同探究活動は、学部四年間と大学院を通して培う実践的な力量形成そのもので、非常に貴重な体験活動です。全国の教員養成系学部や大学、さらには私立大学でも可能な形で構想、実践されれば、大学と学校現場が日常的に連携するサイクルが生まれてくるのではないのでしょうか。子どもの成長、学生の成長、さらには私たち教員の成長も含んだ大きな可能性のあるプロジェクトです。

とが不十分で、それぞれの専門をそれぞれの土俵で教えていければよい、という狭い判断があった。戦前の師範学校に戻るとはもちろん反対であるが、戦後の教員養成学部が教師の専門性、専門職性の議論を前面にすえて議論してきたかどうかは、今現在改めて問われていると思う。教員養成の閉鎖制はもちろん否定されるべきであるが、教員養成学部としての独自性、専門性について、今こそ改めて議論され学部全体の改革・改造に向かわなければ、財政構造改革の現在、教員養成学部不要論が登場するのではないかと危惧している。

私たち福井大学では、三つの教授会見解を出している。第一に、「地域の教育改革を支える教育系学部・大学院における教師教育のあり方」(二〇〇〇年九月十四日)、第二に「地域に根ざし開かれた教育・学術・研究の拠点としての教育地域科学部のあり方」(二〇〇二年十月五日)、第三に「二十一世紀における日本の教師教育改革のデザイン」(二〇〇三年三月十五日)の三つである。私たちはこの三つの教授会見解の立場から、戦後の教員養成のあり方を問い直し、実践的な教員養成のあり方を構想し実践してきた。今回文部科学省に採択されたプロジェクト「地域と協働する実践的教員養成プロジェクト」ライフパートナー事業と

探求ネットワークを中心に」は、ここ十年間ほどの蓄積が評価されたものである。このプロジェクトは、学生を不登校の子どもたちのもとへ派遣するライフパートナー事業と、学生が一年の入学時から小学生の子どもたちと継続的に長期にわたって総合学習を展開する「探求ネットワーク」の二つの取りくみである。このプロジェクトを通して、学生たちは教師に向けての意欲を高め、様々な学びをしてきている。以下、本稿ではこのプロジェクトの紹介をしながら、これからの教員養成のあり方についての一つの提言をしていけたらと考えている。

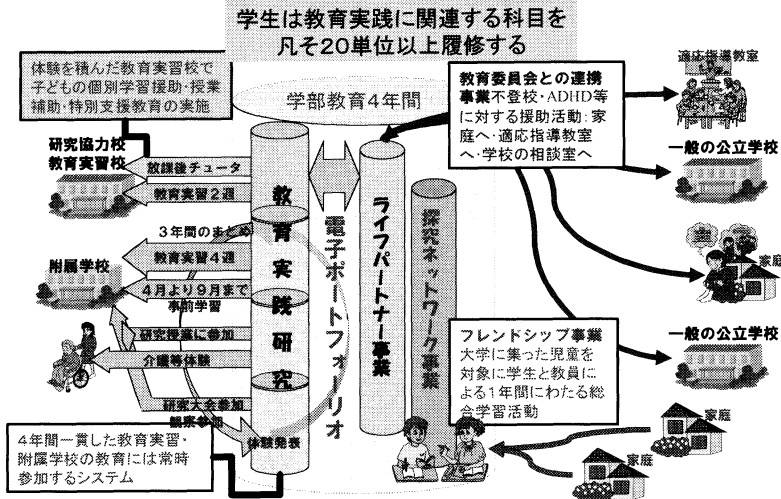
□ 地域と協働する

実践的教員養成プロジェクトの全体像

二〇〇三（平成十五）年度の文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」（COL）に採択された福井大学教育地域科学部のプロジェクト名は「地域と協働する実践的教員養成プロジェクト—ライフパートナー事業と探求ネットワークを中心に—」である。全国の国公私立大学六百六十四件の応募で、採択は八十件であった。

柱の一つである「ライフパートナー事業」は福井市教育委員会と協働して一九九四（平成六）年度から始まり、二

学部教育段階における地域と一体化した教員養成 （地域と連携した教育実践研究の充実）



〇〇一（平成十三）年度では福井県内の七市町に拡大し、福井県全体の不登校児八百二十五名の約四分の一（二百二十二名）と福井大学生（百三十名）がかかわるまでに発展してきている。

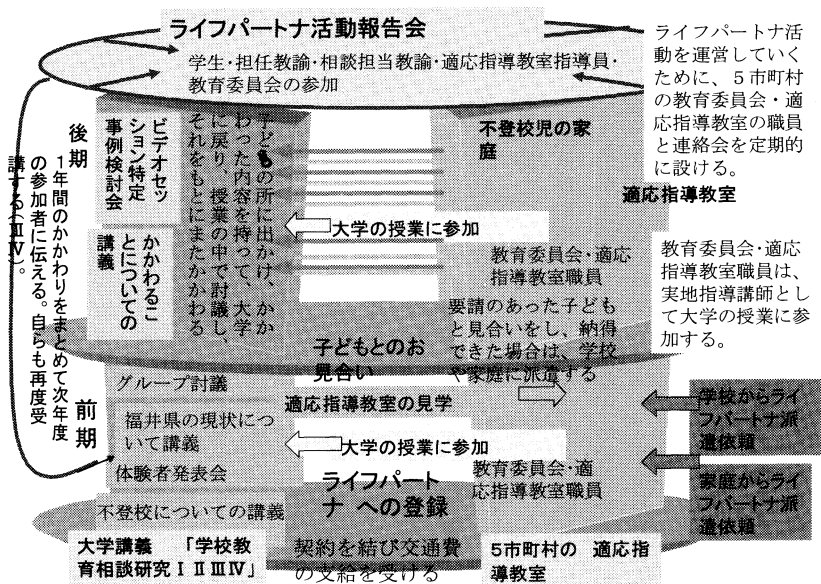
もう一つの柱である「探求ネットワーク」は地域の小学生と大学生スタッフが長期にわたって総合学習を進めていくプロジェクトで、一九九五（平成七）年度から始まり、二〇〇四（平成十六）年度は小学生中心で二百五十名、学生は百三十名が参加して、五月から十二月までの八ヶ月間継続して活動を行っている。

この二つのプロジェクトは、教員養成のために四年間を通して継続的に実施される教育実践研究、大学教員が小中学校にでかけ、学校の課題を取り上げる大学院学校改革実践研究コースなどのプロジェクト群とネットワークをなして実施されている。さらに、教員養成ではない二つの課程（地域文化課程と地域社会課程）での地域ボランティアや児童館での活動、行政評価への参加等とも連動し、学部全体としての地域での協働並びに学生の実践的力量形成への効果をあげている。

(1) ライフパートナー事業

不登校の子どもたちが増加し続け、適応指導教室を開設してもなかなか子どもたちが集まらないという実態に、先生方が戸惑い悩み続けるという現実と向き合ったときに、福井大学と教育の現場が共に連携して始めたのがライフパートナー事業である。この事業は、不登校の子どもたちを学校に復帰させることが目的ではなく、閉じこもっている不登校の子どもたちが、教師と違う若いお兄さん、お姉さんの学生と一緒に語らい、遊び、時には勉強をする中で、自分への自信と自己肯定感を増し、協同することの喜びを再発見することが目的である。結果として学校に戻る場合もあれば、そうでない場合もある。基本は、その子どもをサポートする学生がいるという安心感を子どもたちが持つてくれればと願い実践している。

大学の授業では「学校教育相談研究」という必修授業（半期二単位で前期後期必修）で百名以上の学生が受講している。学生たちは子どもたちと関わった内容を記録として残し、大学の授業の中で事例研究として報告する。プライベートの保護を前提としつつ、他の学生や大学教員、それにこの授業に協働参加している教育委員会や適応指導教室の先生方も一緒に、小グループでのケースカンファレンスを行っている。不登校の子どもが担任教師には言えないこと



を学生にそつと話す。学生は子どもと学校の板ばさみで悩む。その相談を大学の授業で行うケースカンファレンスを通してみんなで考えあう。子どもの思いもわかるし、なんとかしようと思っている担任の思いもわかる。でも、どこかでかみ合っていないことが少しずつ理解されてくる。それではこうしたらどうか、先生にはこのように伝えたら、など、子どもの思いを基本に据えながら、少しずつ問題の解決に向けて知恵を出し合っていく。このようなケースカンファレンスと不登校に関する講義も組み込みながら、学生たちは一年間の授業に参加している。学生の中には、二年目も受講している学生もいたり、大学院生もサポート役で参加している。経験者の学生たちは初めて参加した学生に自分の経験談を話したりしてサポートする。この授業そのものが学生同士の世代継承のサイクルを持っている。

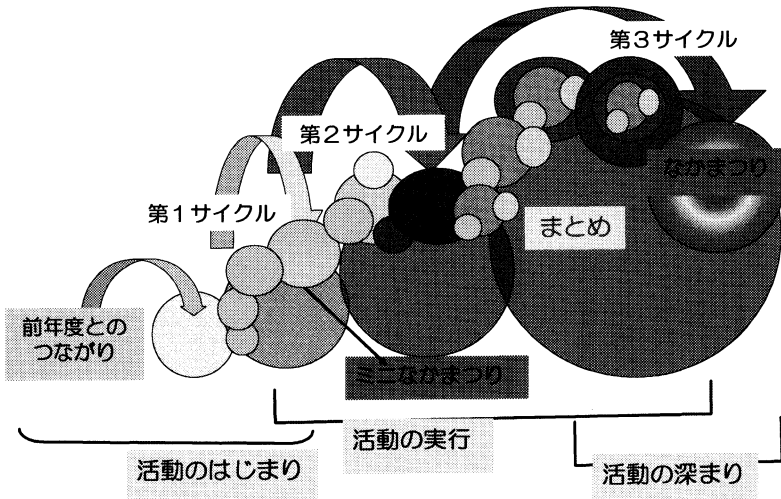
不登校児の保護者からは活動終了後も活動を継続してほしいとの要望が多く、家庭教師として継続することについては、学生の判断に委ねている。又学校の相談室ではライフパートナーが訪問する日だけ、登校する生徒もおり、ライフパートナーは相談室運営上なくてはならない存在になっている。

(2) 探求ネットワーク

土曜日の朝八時過ぎ、教育地域科学部には地域の小学生を中心に三百名近くが集まる。ロビーや活動場所待っている学生スタッフと子どもたちの語らう声で大学のキャンパスはにぎやかになる。子どもたちは五月から十二月までの八ヶ月間、大学生スタッフと一緒に、自らが選んだテーマで共同の探求プロジェクトをつくりあげていく。第一サイクル（五―七月）、第二サイクル（八―九月）、第三サイクル（十―十二月）の三つのサイクルをまわしながら、発展的な学びのサイクルを構築していく。第四サイクル（十二―三月）は八ヶ月間のまとめのサイクルで、報告書作りや三月に行うラウンドテーブルで他大学の学生や教師たちと共同で学びあう場をつくっている。

一年かけて熱気球やモデルバルーンづくりに取り組む気球ブロック、人形劇を創作し長野県飯田市の世界人形劇フェスティバルに参加する人形劇ブロック、毎回工夫を重ねながら料理や紙すきに取り組むもぐもぐブロックと紙すきブロック、調査探検を企画し実行する歴史探検ブロックと野外活動のデコボコ冒険ブロック、附属養護学校を会場に障害児と活動を共にする「ふれあいフレンドクラブ」(F

探求ネットワークの1年間の活動展開



FC)の七ブロックが柱であるが、二〇〇四年度はデコボコ冒険ブロックが大所帯となったため、三つのブロック(ナチュラルクッキングパラダイス、わくわくキャンピング工房、それいけ!!探検隊)に分れ、探求全体では九ブロックとなった。

学生スタッフ百余名は毎週水曜日の夜、全体会議を持ち、各ブロックの活動紹介、「探求ネットワーク」全体の企画運営、係会議(運営・「わーい」・会計・広報・インターネット)などを行い、活動を振り返り、次の活動へのサイクルをつくり上げていく。年度末の第四サイクルでは、報告書をつくり他大学との交流会であるラウンドテーブル(三月)を準備する。二〇〇四年度で十年目となる「探求ネットワーク」には小学生の時から連続して参加している大学生・高校生が学生スタッフ以上の経験と熱意で活動を支えていてくれる。経験者の子どもが新しい子どもを支える子供同士の世代継承のサイクルもしっかりと位置づけられている。

□ 本プロジェクトの目的と大学としての位置づけ

今回文部科学省のCOLに採択されたが、その企画理由の基本は、地域の必要性に応える学生の教師としての実践

的力量形成である。現在、地方の教員養成学部のあり方が問われ存続が危ぶまれている。大学が地域と共生して地域貢献しつつ、教師の力量形成を促すことのできる取り組みを開発し、それを公開していくことが地方国立大学の使命だと考えている。本学部では、地域での活動を基盤に実践と省察のサイクルを長期にわたって重ね、実践的な探究活動を軸として実践と研究を有機的に結びつけるカリキュラムづくりを目指している。そして、この二つのプロジェクトがその中核として展開されている。

二十一世紀の教育改革の中で、新しい教育を担う教師の新しい力量形成の仕組みが必要となっている。本学部の役割は、一人一人の子どもたちを支え、子どもたちが主体となる共同探求の学びを中心とする学校改革の道筋を提起し、実例をつくり、それを担う教師の力量形成を支えていくことである。それが同時に本プロジェクトの目的でもある。以下の六つの特色がある。

① 地域の子どもたちとともに歩む。問題を抱えた子どもたち一人一人にふれあい、一年以上にわたって、子どもたちの共同探求を支える活動を積み重ねる。

② 地域と協働して授業を展開する。授業には教育委員会職員・現職教員等が参加する。ティーチングアシスタ

ントとして経験者の大学院生も参加する。

(以上、ライフパートナー事業)

③実践し省察し実践するサイクルを重ねる。スタッフは毎回の活動を振り返り、次の活動を計画する。活動記録は毎週整理され、通信で全員に返される。年度末には活動全体の振り返りがなされ、報告書にまとめられる。

④共同のプロジェクトを自ら運営しつくる。活動の運営、通信、広報、会計などの役割を学生スタッフが分担し、毎週準備が進められる。一年生から四年生まで、それぞれの経験を生かして活動するために、学生メンバーは自治的な活動や組織運営の力を培っている。

(以上、探求ネットワーク)

⑤学部・大学院を通じた全体のカリキュラムとの有機的な連携。二つのプロジェクトは、学部全体のカリキュラムのコアに位置付き支えられている。四年間行われる教育実践研究(教育実習を含む)、生活科関連科目や教育総合演習など、一連の協働プロジェクト群の存在が、二つのプロジェクトと有機的につながり、刺激しあい、支えあっている。

⑥大学を超えた実践・研究ネットワーク。二つのプロジ

エクトは報告書にまとめられ、年度末に各地の大学教員や学生が参加する福井実践研究ラウンドテーブルで報告・検討される。

□ 長期にわたる総合学習の展開とその実践分析

―「探求ネットワーク」の十年

(1) 探求ネットワーク十年の全体像

筆者は二つのプロジェクトのうち、「探求ネットワーク」に最初から関わってきた関係で、少し詳しく十年間の活動紹介をしておきたい。「探求ネットワーク」開始当時のねらいは、一九九五(平成七)年度の四月に初めて行った以下の参加者募集チラシのメッセージに込められている。

「自分たちで話し合って つくりあげて へなま〜と味わい合ったり ひろく伝えたり けつして楽じゃないけど だからこそ 『やったー!!』って よろこびあえるよ うな そんな活動 やりたいね。」

この短い言葉の中に、この「探求ネットワーク」の精神が凝縮されている。そして、活動の意義が次のように述べられている。

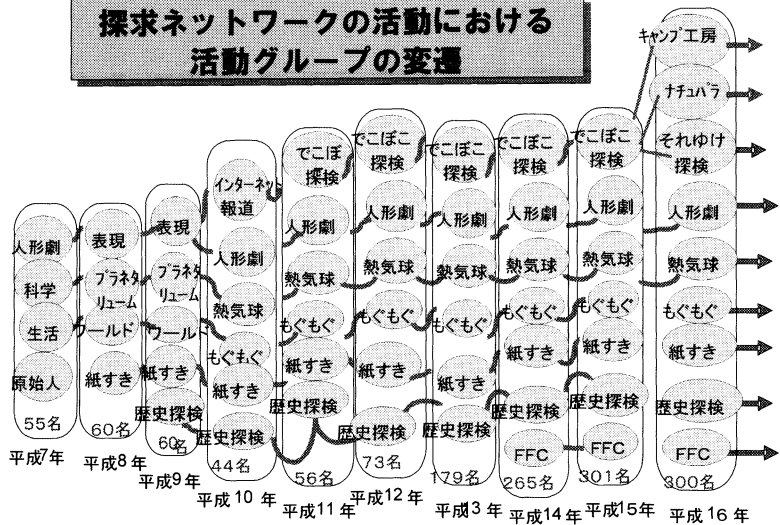
「二十一世紀の社会を担っていく子どもたち。／自分た

ち自身で考え、話し合い、協力して、これまでには願望でしかなかった広いコミュニケーション空間のなかで、よりゆたかな共同社会を作り上げていくことを、期待せずにはいられません。／ものごとをつきつめて探求していく力。自分の調べたこと・考えたこと・感じたことを、より多くの人たちと分かちあえるように表現していく力。話し合い協力して、時間を要し、技を必要とする活動を創っていく力。そしてそれらすべてを互いに調整しあって運営していく自治の力。／新しいコミュニケーション、新しい共同社会を拓くために、そうした力をつちかかっていくことが求められていると思います。」

今までの学習のあり方に対して、「これまでの学習では、短時間でこなせる形にお膳立てされた課題を数多く、速く正確にこなすことに大きな比重がかけられてきました。しかし、そうした形態の学習は、いまのべたような力にはつながっていません。新しい力をつちかう、新しい学びのあり方が問われています」と指摘し、最後に、次のような言葉で締めくくられています。

「福井大学では、附属学校とも協力しながら、新しい学びのありかたを求める共同研究を進めてきています。全国各地の学校でも、新しい学習への意欲的な実践と研究がす

探求ネットワークの活動における活動グループの変遷



すみつつあり、私たちも積極的にそうした学校を訪ねながら、探求を続けてきています。／探求ネットワークはそうしたこれまでの取り組みをふまえながら、実際に福井の子どもたちといっしょに、新しい探求の実践とその交流ネットワークを作っていくこうとするプロジェクトです。」
十年間の各ブロックの展開図は前頁の通りである。

以下に、各年度ごとのブロック名称と参加した子どもと学生の人数をあげることにする（一九九五―一九九七年度は大学の公開講座、一九九八年度以降は文部科学省フレンドシップ事業）。

- 一九九五年度（人形劇・原始人・昔遊び・パン作り・恐竜博士・りか工作） 子ども五十七人、学生十六人。
- 一九九六年度（人形劇・インターネット・楽器づくり・生活・科学） 子ども五十五人、学生十三人。
- 一九九七年度（人形劇・ザワールド・自然・報道） 子ども六十四人、学生二十四人。
- 一九九八年度（人形劇・ザワールド・自然・報道） 子ども四十四人、学生二十九人。
- 一九九九年度（人形劇・ワールド・紙すき・気球・デコボコ冒険） 子ども五十六人、学生四十四人。

- 二〇〇〇年度（人形劇・もぐもぐ・紙すき・気球・デコボコ冒険・歴史探検） 子ども七十三人、学生三十六人。
- 二〇〇一年度（人形劇・もぐもぐ・紙すき・気球・デコボコ冒険・歴史探検） 子ども百七十九人、学生五十三人。
- 二〇〇二年度（人形劇・もぐもぐ・紙すき・気球・デコボコ冒険・歴史探検・FFC） 子ども二百三十人、学生七十人。
- 二〇〇三年度（人形劇・もぐもぐ・紙すき・気球・デコボコ冒険・歴史探検・FFC） 子ども二百五十人、学生百二十人。
- 二〇〇四年度（人形劇・もぐもぐ・紙すき・気球・ナチュラルクッキングパラダイス・それいけ探検隊・キャンプ工房・歴史探検・FFC） 子ども二百五十人、学生百五十人。

このブロック編成で特徴的なのは、第一に二〇〇二年度から障害をもった子どもたちを対象としたFFC（ふれあいフレンドクラブ）を立ち上げたことである。二〇〇四年度で三年目に入っているが、当初のスタッフは障害児教育を専門とする学生が多かった。しかし、三年目の今年は障害児教育の学生も含まれるが、その他の様々な専門の学生も参加して障害を持つ子ども達と触れ合っている。第二は、二〇〇三年度までデコボコ冒険ブロックという、子どもたちにとって人気のある大規模のブロックを、子どもたち一

一人一人の願いに応えられるように、三つのブロックに分割・再編したことである。三つのブロックとは、ナチュラルクッキングパラダイス・それいけ探検隊・わくわくキャン工房である。

(2) 十年間の長期にわたる活動の実践分析

―探求するコミュニティの実践分析―

分析の視点 私たちは今まで、福井大学で共同研究をしていく過程で、活動を創っていくプロセス

を、発意―構想・構築―実践―省察―発意というサイクルでみていくことが重要であることを強調してきた。その探究サイクルはデュイイの活動の省察サイクルをベースにして、新たに構想した活動のサイクルである。具体的に長野県伊那小学校の総合学習や、戦前の奈良女子高等師範学校附属小学校の長期にわたる実践、さらには福井大学教育地域科学部附属中学校の実践分析などに、この枠組みを使いながら実践分析を行ってきた。

(寺岡英男・柳澤昌一・松木健一・森透)「学習―教育過程分析の方法論的基礎研究」『福井大学教育学部紀要』第四十一号、一九九一年。寺岡英男・柳澤昌一・流真名美「学習過程における認識発展とへ追究―コミュニケーション編成の展開」『福

井大学教育学部紀要』第四十六号、一九九三年。森透「長期にわたる総合学習実践の分析」『教育方法学研究』第二十五巻、一九九九年。寺岡英男・柳澤昌一・松木健一・氏家靖浩・森透「教育改革―教師教育改革と学校―大学の共同研究の展開」『福井大学教育地域科学部紀要』第五十五号、一九九九年。福井大学教育地域科学部附属中学校研究会「探究・創造・表現する総合的な学習（学びをネットワークする）」『東洋館出版社、一九九九年、同中学校「中学校を創る―探究するコミュニティ―へ』東洋館出版社、二〇〇四年など）。

ここでは、最近翻訳が出された『コミュニティ・オブ・プラクティス』（翔泳社、二〇〇二年）で展開されている学習論を手がかりに、探求ネットワークのコミュニティの実践分析を考えてみたい。本書は、ハーバード・ビジネス・スクールの出版本の一つで、著者はジョン・レイブとの共著で有名な『状況に埋め込まれた学習』（産業図書、一九九三年）を書いたエティエンヌ・ウエンガーと、リチャード・マクダーモットおよびウイリアム・M・スナイダールの三人による共同作品である。本書のコミュニティ・オブ・プラクティス（Community of Practice）という用語は、前述した「状況に埋め込まれた学習」に出てくる造語である。ウエンガーは、本書の著者紹介によれば、独立コンサル

ルタントであり、コミュニティ・オブ・プラクティス研究のパイオニアであり、この分野の世界的リーダーである。

彼の研究は理論的なものにとどまらず、コンサルタントとしても、実践コミュニティの育成をしたり、学習とコミュニティとの間の相乗作用を活用するナレッジ・システムの開発を実際に推進している。本書は出版元からもわかるように、企業における実践的な学習、知的探究のコミュニティの生成・発展を理論化したものであるが、学校教育でもこの考え方は大変参考になり刺激的である。

本書の内容を必要な限りで紹介すると、実践コミュニティとは、「あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく集団」であり（同書三三頁）、また、歴史的には「人類が洞窟に住み、たき火の周りに集い、獲物を追いつめる作戦や矢じりの形や食用に適する草の根について話し合っていた太古の昔から続く、人類初の知識を核とした社会的枠組」であるという（同書三四頁）。そして、「だれもが職場や学校、家庭や趣味などを通じて、いくつもの実践コミュニティに属している。名前のあるものもあれば、名のないものもある。（中略）どんな形で参加しているにせよ、実践コミュニティに所属することがどんなことなのか、

たいいていの人がよく知っているのだ」という（同書三五頁）。しかし、なぜ今になって突然それに目を向けるのか。それは「より意図的かつ系統的に知識を経営に活かすこと、つまり古来の仕組みに、ビジネスで新しく中枢的な役割を担わせることが組織にとって必要になっていくから」である（同書三五頁）。そして本書はその実践コミュニティを育成する必要から編集されたもので、「組織はメンバーやコミュニティだけでなく、組織自身のためにも、実践コミュニティを積極的かつ体系的に育成しなければならない」と主張されている（同書四四頁）。

実践コミュニティの発展段階について、「コミュニティは他の生き物と同じように、完成した状態で生まれてくるのではなく、誕生、成長、死、という自然のサイクルを経験する」（同書一一五頁）として、五つの段階を提起している。つまり、「潜在、結託、成熟、維持・向上、変容」であり（同前）、「実践コミュニティは、将来的に結びつきを強め、組織のより重要な一部になる可能性を秘めた、緩やかなネットワークとして始まることが多い。メンバーはコネクションを築くうちに、一つのコミュニティとしてまとまるようになる。コミュニティは一旦成立すると、通常はメンバーの人数とメンバーが共有する知識の深さの両面

で、成長していく。成熟したコミュニティは、他の生き物と同様、活動レベルが周期的に上下する。この段階のコミュニティは、共有する知識や実践を積極的に世話し、意識的に作り出すことが多い」（同書一一六頁）という。ただし、この発展段階のモデルは「あまり杓子定規に考えてはいけない」（同書一一七頁）として、次のように様々な発展段階のあり様が示されている。

「五十歳で青春を謳歌する人や、過酷な環境の下で早く大人になってしまいう子どもがいるように、コミュニティによって発展段階は大きく異なる。ある段階を急ぎ足で通過するコミュニティもあれば、同じ段階に長い時間をかけるものもある。ある段階を飛ばして進み、後から初期の問題に取り組むためにその段階に立ち戻るコミュニティもあれば、緊張関係に決着をつけられず、複数の段階の緊張関係に同時に苦しめられるものもある。最後の段階までたどり着かないコミュニティもあれば、第二、第三段階で能力的なピークを迎えるものもある。」（同書一一七—一一八頁）

以上のコミュニティの発展段階のモデルを参考にしつつ、以下では探求ネットワークの十年間の歩みを振り返ってみたいが、全体的に荒削りであり、必ずしも発展段階が精緻に捉えられているわけではない。一つの試論として考

察をすすめたい。

探求ネットワーク

十年間の展開とその省察

ここでは報告書『共同探求者を育むプロセス 三—子どもたちとの長期にわたる活動から見えてくる探求的学び』（福井大学教育地域科学部総合学習研究 探求ネットワーク二〇〇三年活動報告書、二〇〇四年三月九日、以下『報告書』という）を手がかりに省察してみたい。

『報告書』は第四章で「捉え直し積み重ねていく探求活動—探求ネットワーク九年間のあゆみ—」として、探求ネットワーク全体の九年間の歩みの省察がなされており、九つの各ブロックの報告の最後にそれぞれのブロックごとの九年間（F F Cは二年間）の歩みが省察されている。これらを見ながら、九年間の歩み及び二〇〇四年度も含めれば十年間の歩みを考えてみたい。

「探求ネットワーク」が始まる前の段階で、どのような実践が行われていたのか。『報告書』によれば、「教育学・教育心理学・教科教育学等のスタッフや学生約三十人からなる『学習過程研究』というゼミナールを一九九〇年、九五年度まで行っていた」と、そのゼミでは福井大学附属小学校の実践に継続的に参加しながらも授業を作り上げて

いく取組みをしたり、長野県伊那市立伊那小学校の実践記録を読みあたりして、「学習過程の発展のプロセスを形成・構築していくこと」について議論した。そして「当初のスタッフであった寺岡、森、柳澤」は、学校五日制の実施を契機に、「授業として子どもたちと探求のかつ継続的な活動を行うことを目的」として、一九九五年に探求ネットワークを立ち上げたとある（同書三八〇頁）。この段階は「潜在」の時期といえる。

『報告書』では、九年間の歴史が大きく三つの時期に分けられて書かれている。第一期は、初年度の一九九五―一九九七年度の三年間で、「スタッフが探求ネットワークの活動をどのようにしていくべきかを試行錯誤を重ねている時期」（同書三八〇頁）であり、前述した五段階でいえば「潜在」の時期といえる。「一年目を経験したスタッフは、二年目に入って来たスタッフを養成し、さらに二年目を経験したスタッフが三年目に入って来たスタッフを養成し、この三年間で、ようやく探求ネットワークの学年層」ができた時期である（同前）。しかし活動は困難を極め、二年目に持ち越したスタッフはわずか二名であった。二年目の活動の最後の振り返りのサイクルで、「展開の吟味やスタッフ体制の問題などをじっくり話し合ったことと、この年の

それぞれの活動で手ごたえをつかんだスタッフが多かったことで、多くのスタッフが三年目の活動を引き継ぐこと」になったことにより、「三年目になってようやくそれまで培ってきた活動や経験が記録化され、新しいスタッフと共有しながらそれを基に活動を展開していくという体制が確立され」、「四年目以降の活動がより安定性があり且つ発展性のあるもの」になったと書かれている（同前）。

第二期は、一九九八―一九九九年度の二年間で、「世代交代の時期」（同書三八一頁）で、「結託」の段階といえる。四年目になると、スタッフは「三年間の蓄積によって活動の見通しを立てられる力量を持った」メンバーが増えたが、同時に「それまで中心となっていたスタッフがやめたり、あるいは裏方に退いたり」と世代交代が行われた（同前）。一方、子どもたちは「一年目からやってきた子どもたちがやめ、参加一・二年目の子どもたちばかりになり、子どもたちの主体的・自主的な学びということに関して振り出しに戻った」とある（同前）。そのような困難な時期であったが、「これまで積み重ねられた活動や経験の蓄積がそれまで活動してきたスタッフを通じて新しく入ってきた人たちと共有しながら受け継がれ」た時期といえる（同前）。この年より「ミニなかまつり」が実施され、第一サイクル

のまとめを意識した活動が組まれるようになり、年単位で活動を作り上げるといふ体制が確立されてきたといえる。また一九九八年からは手書きの機関誌『わーい』を全てパソコンによる『わーい』へと編集を変えることができた。

第三期は、二〇〇〇—二〇〇三年度の四年間で、「規模の拡大の時期」（同前）であり、「成熟」の段階といえる。子どもたちの人数もスタッフの人数も飛躍的に増加した時期である。一九九九年度が子ども五十六人、スタッフ四十四人であったのが、二〇〇〇年度子ども七十三人、スタッフ三十六人、二〇〇一年度子ども百七十九人、スタッフ五十三人、二〇〇二年度子ども二百三十人、スタッフ七十八人、二〇〇三年度子ども二百五十人、スタッフ百二十人、二〇〇四年度子ども二百五十人、スタッフ百六十人という規模であった。人数が多くなると、日常的な運営会議の持ち方も工夫がいる。二〇〇一年度までは一つの部屋でスタッフの全体会をしてきたが、二〇〇二年度からは二つの部屋に三ブロックを分けて組み合わせたり、定期的に大講義室で活動のプレゼンテーションを行ったりした。係活動も一九九九年度までは「運営係」「会計係」「通信係」の三つであったが、二〇〇〇年度からは「通信係」が「わーい係」と「広報係」に分れ、新たに「インターネット係」も含め

て、五つの係体制（運営係」「会計係」「わーい係」「広報係」「インターネット係」となった。さらに、二〇〇一年度からは三月に、他大学のフレンドシップ事業の取り組みや実践者を招き実践を紹介しあい実践を語り合う場を設けるようになった。同時に、『報告書』というものをまとめるようになった。二〇〇二年度からは障害児を対象とした探求活動ブロック「ふれあいフレンドクラブ」（FFC）も立ち上げることができた（以上、同書三八一頁）。

第四期の二〇〇四年度以降は「維持・向上」や「変容」を迎える時期となるであろう。今後「探求ネットワーク」がどのような形態となって活動が展開するのか、全く別の形で新たに再出発するのかどうかは予測が難しいが、現在大学のカリキュラムとして正式に位置づけられており（一二年生対象の選択授業「総合学習研究」及び「学習過程研究」ほか）、今後ますます実践的な教員養成のあり方が鋭く問われている現状では、「探求ネットワーク」のような活動が全国の教員養成の一つのあり方を示すことはまぢがないだろう。

□ おわりに

二〇〇四年八月には文部科学省の意向として、教員養成

における専門職大学院の設置や、学部四年間と大学院二年間をつなぐ六年一貫による実践的力量形成をめざす教員養成システムを構想し実施に移すという動向が顕著である。

「探求ネットワーク」は四年間の学部生の実践的力量形成の場であり、さらに大学院では学校現場と「探求ネットワーク」をつなぐコーディネーターとしての役割が院生に求められてもよいのではないかと考えている。現在、「探求ネットワーク」には県内の多くの小学校から子どもたちが参加しているが、直接参加している学校と連携して活動を行ってはいない。むしろ学生たちに自分の発想で自由に構想・実践してもらっている。教育実習も全く経験していない一年生から子ども達と長期にわたってかかわりながら、活動を組み立てていく難しさと面白さを経験している。学生たちがこれらの体験を四年間積み重ね、大学院へ進めば学校現場の総合学習などへも視野を広げながら、大学と学校との内実を伴った協働のあり方を模索し実践していけるのではないかと考えている。この点は、今後継続して議論していきたいと考えている。

〈参考文献〉

*報告書『共同探求者を育むプロセス 三丁子どもたちとの長

期にわたる活動から見えてくる探求的学び』(福井大学教育地域科学部 総合学習研究 探求ネットワーク二〇〇三年 活動報告書 二〇〇四年三月九日、全三八五頁)これは二〇〇三年度の一年間の活動を学生たち主体でまとめたものである。

*森透・寺岡英男・柳澤昌一「小・中学生と学生との探究活動とその省察」『福井大学教育実践研究』第二十八号、二〇〇三年

*森透・寺岡英男・柳澤昌一「長期にわたる総合学習の展開とその実践分析」『福井大学教育実践研究』第二十九号、二〇〇四年

(注記)

福井大学のCOLの申請代表者は、同僚の松木健一(教育心理学)で、本稿は同氏の提案文書に多くを拠っている。ここに謝意を表する。